

2025 年 4 月 1 日



東京学芸大学附属大泉小学校

2025 (令和 7) 年度 教育課程特例校の取組について

～教育課程特例の概要～

1. 新設教科等名及びその目標・内容

全学年において「探究」の時間を設定し、国際バカロレア (IB) の PYP (プライマリー イヤーズ プログラム Primary Years Programme) の探究プログラム (教科の枠をこえた探究的な学び) が、充実して実践できるようにする。

2. 内容を削減する既存教科等について

(削減する理由、削減する教科等の内容及び該当内容の教育課程上の補完について)

本校は IB ワールドスクールの PYP 認定校を 2022 (令和 4 年) 8 月に取得した。PYP の探究プログラムを実践していくため、「教科の枠をこえた探究的な学び」を充実させる。そのために、総合的な学習の時間を「探究」とし、週 6 ～ 7 時間の時数をとる。その分、教科をスリム化する。国語科を週に 1 ～ 2 時間、理科を 1 時間、社会科 1 時間減じるとともに、その他の教科についても年間で数時間減じる。

■国語科は「書くこと」「話すこと聞くこと」を中心とした内容を「探究」の時間の中で指導することとし、各学年年間 70 時間程度の内容を「探究」の時間に移す。

■社会科は指導内容の重点化を行い、年間 25 時間程度の削減を行う。以下の①～④の考え方で、削減を行う。①中学校に直接つながる単元は現行のまま実施する。(政治・歴史・日本の国土等の内容) ②3 年生から 6 年生までの 4 年間全体で、時間的な視点、空間的な視点、相互関係的な視点を育成できるように配慮する。③小単元をまとめ、問いの設定時間を縮小する。④類似事例については削除する。

■理科は、指導内容の削減は行わないが、指導方法の工夫を行い、年間 35 時間程度の削減を行う。以下の⑤⑥の考え方で、削減を行う。⑤課題設定、予想、実験方法、結果の考察等の過程のうち、単元によって重点的に指導を行う過程を設定し、それ以外の過程についての指導時間数を削減する。⑥関連する内容を統合させて指導する。

■算数・音楽・図工・家庭・体育・道徳についても、指導内容の重点化や指導方法の工夫を行い、各教科、年間 5 ～ 10 時間程度の削減を行う。

■生活科と総合的な学習の時間は、全ての授業時数を「探究」の指導時数とする。

3. 特別の教育課程を開始する年度

2023 (令和 5) 年 4 月 1 日 ～

4. 学習指導要領に定める内容事項を指導するため、総授業時間数を特別の教育課程においても確保する。

	各教科の授業時数										特別の教科である道	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第1学年	238 (-68)		131 (-5)		0 (-102)	64 (-4)	65 (-3)		97 (-5)		20 (-14)	34 (+34)		34	201 (+201)	884 (+34)
第2学年	245 (-70)		165 (-10)		0 (-105)	66 (-4)	65 (-5)		100 (-5)		20 (-15)	35 (+35)		35	214 (+214)	945 (+35)
第3学年	175 (-70)	55 (-15)	165 (-10)	75 (-15)		56 (-4)	55 (-5)		100 (-5)		25 (-10)	35	0 (-70)	35	204 (+204)	980 (0)
第4学年	175 (-70)	65 (-25)	165 (-10)	70 (-35)		56 (-4)	55 (-5)		100 (-5)		25 (-10)	35	0 (-70)	35	234 (+234)	1015 (0)
第5学年	135 (-40)	75 (-25)	165 (-10)	70 (-35)		46 (-4)	45 (-5)	58 (-2)	85 (-5)	70	25 (-10)		0 (-70)	35	206 (+206)	1015 (0)
第6学年	135 (-40)	75 (-30)	165 (-10)	70 (-35)		46 (-4)	45 (-5)	53 (-2)	85 (-5)	70	25 (-10)		0 (-70)	35	211 (+211)	1015 (0)
計	1103 (-358)	270 (-95)	956 (-55)	285 (-120)	0 (-207)	334 (-24)	330 (-28)	111 (-4)	567 (-30)	140	140 (+69)	139 (+69)	0 (-280)	209	1270 (+1270)	5854 (+69)

2026 年 3 月 28 日

令和 7 年度 教育課程特例校 自己評価と学校関係者評価

東京学芸大学附属大泉小学校

1. 教育課程特例校としての取組

本校は、国際バカロレア教育（IB）の初等教育プログラムである PYP（Primary Years Programme）に取り組むための特別な教育課程を編成している。IB は「多様な文化への理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことへ貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ人材の育成」を目的とし、10 の学習者像を掲げている。PYP では「教科の枠をこえた学び」「探究的な学び」「概念的な理解に深める学び」を充実させた教育課程に取り組む。

2. 自己評価と学校関係者評価

自己評価	評価	学校関係者評価
<状況> PYP 探究プログラムの充実と本校の特色を活かした教育課程に取り組んでいる。特に今年は、概念的な理解を育む PYP の授業づくりや IB の集大成である 6 年 Exhibition の実践に取り組むと共に、新しい TDT（教科の枠をこえたテーマ）に対応した探究単元の開発に学校全体で取り組んだ。また、年内 4 回の校内授業研究会の公開や 1 月に研究発表会を行った。また、他の IB 校との連携も積極的に取り組んだ。教科学習の時数をスリム化し、「探究」を週 6 時間設定している。1 コマ 40 分で、1 日に最大 7 コマの生活時程で取り組んでいる。保護者への説明も保護者会毎に児童の姿を通して行っている。 <成果> PYP カリキュラムの根幹となるディスクリプターといわれる探究の対象が新しく改訂されたことへ対応し、36 単元を開発することが成果である。毎週金曜日 7 校時は教員で探究打ち合わせをする時間を確保していることが運営上で効果的であった。本研究の取組を開始してから、文部科学省の全国学力学習状況調査の記述式問題の無回答率が、顕著に減っている。このことは、児童が様々な情報・条件から、自分なりの解を導き出す力が向上した成果ととらえている。児童の記述からも、児童が断片的な回答ではなく、関連づけて考えを深め、自分なりの納得解を得ようとする姿が増えている。平成 7 年度と同調査では、正答率（正答数÷問題数）を換算すると、全国平均と比して国語では 16.0%、算数では 25.7%、理科では 16.7% 高く、学力低下は全くみられていない。またプレゼンテーション力も向上していると感じている。 <課題と方策> 課題は、探究学習と教科学習との関連性や概念学習の充実である。また 2 年後に IB からの評価期間を控えているためその対応を始めて行く必要がある。学校リーダーチーム（IB コーディネーターと研究推進委員）で、探究単元や教科における概念的な理解を深める授業開発を積み重ねる。評価期間に向けて作業研究会も年間で時間を設け、IB 教育への理解を深めるようにする。教科の枠をこえた探究で学ぶことの有効性等について、児童の姿から検証していく。	B	・IB 研究や PYP の取組が進んでいることが、探究している児童の授業の様子から大変よく分かった。 ・PYP の取り組みについて、新しい教育に取り組むという点では保護者としての期待も大きいので、充実させていくことには賛同をいただいた。 ・しかしながら、価値観が広がることも期待されるその一方で「人間力」も重要であるので、本校の豊かな行事はそのことに大きく貢献しているのので、そのことは今後も大切にしたい教育活動をして欲しいという評価をいただいた。 ・全国学力学習調査の結果もよい状況がある。 ・研究発表会で参観している方はどのような方か。また、本校が発表したことが、日本の他の学校にどのように伝わっているのか、その辺りも調べていくとよいのではないかな。 ・学校が教育活動に熱心に取り組んでいる事へのよい評価がでてはいるが、もう少し詳しいアンケートも実施して、現在の様子を調べる必要性についても指摘をいただいた。

